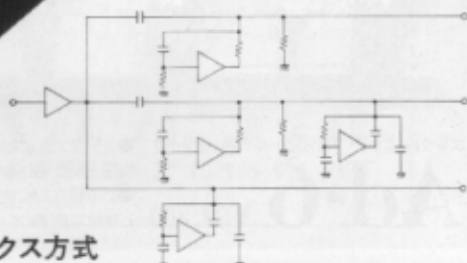


従来方式



フィデリックス方式

マニアは言う、「いいデバイダーがない」

これは本当にオーディオを追及しているマニアから良く聞かれる言葉です。フィデリックスも実は全く同感です。ここでデバイダーのシビアなテスト方法を紹介します。100Hz位の低いクロスオーバーで2ウェイとし、これの高域側のみをマルチでないシステムのプリとパワーの間に入れてローカットフィルターとして使ってみるのです。この時デバイダーを入れる前の音と比べて低音だけカットされた音であれば良いデバイダーというわけです。ところが市販のデバイダーでこれをやってみると音の鮮度は落ちて、歪感も増してしまいます。それもガクッとする程に！そこでこの方法でも音質劣化しないデバイダーの必要性を痛感し、LX-8が開発されたのです。開発中におかったこと、それは市販のデバイダーの音質劣化の半分には何ウェイか？スロープは何dBか？クロスは何Hzかといったことを瞬時に変えられるスイッチャーやコネクタやボリュームのせいと言って良いでしょう。もしスイッチをはずしてハンダ付けし、ボリュームを固定抵抗におきかえたならフィデリックスの理想に半分位近づけて良いでしょう。このためLX-8は全ての仕様はユーザーの指定により制作し、ユーザーが変えられるのはスイッチ式のアッテネーターのみとなっています。残った問題の大部分は現在使われているフィルター回路の信号通過経路が多すぎる点にあるのです。

アンプ、コンデンサー、抵抗コードによって音

がどれほどに変わるかを知っているマニアなら固からフィデリックス方式がいかに問題の少ない効果的な方法かわかるはずで、また内部のアンプは徹底した原音比較法の結論、オールFETのコンプリメンタリー2段アンプでアンプの存在を感じさせません。電源は鉛バッテリーの音にまさるとも劣らないリニアシヤント電源を開発、こうした技術の集大成によりLX-8はまさにリファレンスデバイダーと言える出来ばえです。

カーブについて

6 dB/octは理論的には完璧なカーブ。スピーカーの使用帯域を少なく使うか使用スピーカーが限定されやすい。伝達関数1のものもこれに準じるが苦勞のわりに効果がなく6 dBより得かどうか疑問である。12 dB/octは最も現実的なカーブで、設計法は3通りある。電力合成がフラット(Q=0.7、-3

dBクロス)、電圧合成がフラット(Q=0.5、-6 dBクロス)、シャープネスを重視(Q=0.7、-6 dBクロス)。フィデリックスとしては電圧合成でわずかなうねりがあるとしてもシャープネスを重視した12 dBが最も現実的との結論からこれを標準とした。18 dB以上のスロープを本当に必要とするのは、スピーカーに問題があるか、クロスオーバー周波数に無理があるか特別な場合だけで、デバイダーにとっては複雑化のため音質上では不利となる。

その他の特徴●ポリウムはバイアス回路のみに使用で信号系にはない●ケミコン&ツェナーレスのリニアシヤント電源●アルミシャーシ&非磁性パーツ●全てタンタル抵抗●ファーストリカバリーダイオード●プラスチックケースケミコン、ポリカーボ、ポリプロピレン、スチロール等良質のコンデンサー●カットコアトランス●ニッケルクラッドレス金メッキピンジャック1.25スケアのACコード●ガラスエポキシ70ミクロン銅箔パターン●リレー&コネクターレス

FIDELIX LX-8

新回路アクティブシヤント型チャンネルデバイダー

¥180,000

LX-8 SPECIFICATIONS

- ステレオ&3Dタイプ2-3ウェイ、モノラルタイプ2-5ウェイ
- クロスオーバー周波数/ユーザーの指定
- 入力インピーダンス/47kΩ
- 出力インピーダンス/0-5kΩ
- 減衰特性/6dB・12dB(指定による)
- レベル/0-17dBの架1dBステップ
- 周波数特性/DC-1MHz
- 歪率/0.01%以下
- 重量/3kg
- 寸法/W20.4×H4.4×D30.4cm